

船津伝次平翁と「農業振興船津賞」について

「農業振興船津賞」の設定 ~ 船津伝次平翁功德顕彰会の設立 ~

今日の農村は、農業構造の改革、経営の合理化等に新しい方向を発見しなければならなくなっている。しかも、これは農民の間から力強く盛り上がったものでなければならない。それは、今日農村の青壮年の創意工夫に期待するところが大きい。

農村青年の農業近代化への意欲の根底となるものは、時代は変わっても船津翁の精神に学ぶところが少なくない。

こうしたことから、郷土の偉大な農村指導者であった翁の業績を顕彰し、とくに本県農村青壮年に対する農業振興の力強い指針とするため、有志が相談の結果、船津翁功德顕彰会を設立するに至った。そして、事業の一環として「農業振興船津賞」を設定し、県内模範農家の表彰を行うことになった次第である。

昭和 35 年 8 月

船津伝次平翁功德顕彰会
群馬県農業会議

船津伝次平翁の業績

天保 3 年、勢多郡富士見村に生まれる

船津伝次平翁は、天保 3 年（1831 年）11 月 1 日、勢多郡富士見村大字原之郷に生まれ、幼名を市蔵といたした。

農事の余暇を利用し、青年期より勉学に親しむ。

翁は、青年の頃から父の許で農事に従事するかたわら、農事の余暇をみては勉学に親しみ、国語、漢文、数学等は先生について教を受けた。また、俳諧に長じ、冬扇と号し、俳諧を通じて農村青年等の同志と交わりを深くした。

特に農学に対しては熱意な研究を重ね、20 歳の頃には、里いも、甘藷の作り方と簡易貯蔵法を考案し、近郷農家に普及されるようになった。併せて農事の改良指導を行い、次第に優れた知識人格が認められ、翁の徳望は漸く高まるに至った。

27 歳名主、水源の涵養のため赤城南麓の植林

安政 5 年 (1858 年) 27 歳のとき選ばれて名主となった。当時、この地方は田畑数百町歩に旱害を受けることが多かったため、翁は名主となるや、赤城南麓 400 町歩に植林し、水源の涵養を計画した。領主や村民の理解と協力によって事業が始まると、自ら率先して植林に従事し、3 ヶ年でこの事業を完成した。

現在、赤城南麓の植林事業は翁によって開拓されたものである。

発明、改良技術の数々

父の亡後は、家業の農業経営を継ぐとともに、ますます農蚕業の改良研究にはげみ、いろいろの新しい技術を創案した。たとえば「簡便にさなぎを蒸殺して繭を乾燥する方法」や「桑苗簀伏法、樹播法によって苗木の繁殖を速くする方法」を発明して養蚕の改良に促した。

また、作物の倒伏を防ぎ、増収をはかるための「田畑底破法」や野菜苗床に小石を並べることによって、苗の発育を促進することを考案、これらの技術は広く普及されるに至った。

チョボクレ節の作成

翁はこうした農蚕技術改良の指導のため、農民が理解しやすいように、極めて卑近な「チョボクレ節」を作り、これを面白く朗読して聞かせた。また、これを自費で印刷配布し、情熱をこめて農民の啓発指導、農村振興にあたられた。

チョボクレ節では「稲作小言」、「里いも栽培法」、「養蚕の教」などが面白く、農民に親しまれた代表的なものである。

この他、家畜飼養、植物病虫害、果樹蔬菜園芸、植物の調理法、農家生活全般についても造詣が極めて深く、その指導は懇切を極め、農民の信頼は年とともに高まることとなった。

翁がはじめて内務省後用係

明治 10 年 (1877 年) 時の内務卿大久保公が翁の名声をきき、辞をつくして翁の官吏として、日本の農事改良の任務につくすことをすすめられた。翁はこれを固辞して受けなかったが楫取県令の切なる勧めもあって、遂に決心した。その年の 12 月に上京し、翁がはじめて内務省後用係となったのは 46 歳の時であった。

翁の最初の仕事は、設立日の浅い駒場農学校（後の東京大学農学部）農場の整理と、学理と実際とを調整した作物栽培の試験であった。当時、この仕事は翁においては他に求められなかったにちがいない。翁の努力によって日本最高学府の農場が立派に完成をみ、当時の学生も翁の実際の知識から多くを教えられたことであろう。

この間にも、翁は東奔西走に出張して講話や実地指導に当たり、ほとんど席の暖まる暇もなかったという。

名誉ある受賞

翁の多年にわたる農事改良指導による功績により、明治 23 年（1890 年）11 月、藍綬褒賞を賜り、その後、農務省に移り、さらに明治 26 年（1893 年）農事試験場に転じ、累進して技師に任ぜられ高等官六等、正七位に叙せられた。

また、明治 29 年（1896 年）3 月、大日本農会より、紅白綬有効章が贈られ、その名誉を表彰された。

翁の死

翁は官吏になってから既に 20 年、明治 31 年（1898 年）3 月に健康を害し、官を辞して郷里富士見村に帰られる。余生を郷土に送られることで、郷土の人々も翁の帰郷を喜び、翁より指導を受けられることを期待していた。

しかるに、にわかに発病し、同年 6 月 15 日永眠された。ときに 66 歳であった。

駒場農学校卒業生などによる記念碑の建設

翁の死が全国に伝えられるや、大日本農会、全国の農業団体をはじめ、翁の薫陶を受け、当時農業界の重要な地位にあった駒場農学校卒業生や、翁の指導を受けた人々にとって、翁の高徳を慕いその偉業を後世に伝えるため建碑が計画された。

越えて明治 32 年（1899 年）7 月、東京飛鳥山公園に翁の記念碑が建設。さらに大正 7 年（1918 年）11 月 18 日、大演習の際、従五位が贈られた。

日本農業発展に大きな足跡

以上のように翁は、明治初期の日本農業の転換期にあって、独学をもって民

間技術を創案し、中央に出仕しては、西洋の農学を日本農業の実際に即するよう発展することに腐心し、かつ天性の人徳と相まって懇切に民間指導に一生をささげられ、日本農業の発展に大きな足跡を残されたのである。